

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	梶丸 岳
論文題目	人類学的歌掛け論の研究 —— 中国貴州省の歌掛け「山歌」をめぐって ——		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位申請論文は、中国貴州省での6年にわたるフィールドワークに基づき、少数民族プイ族の伝統的な歌掛けである「山歌」を、社会環境、言語的相互行為、遊び、という3つの側面から分析し、そこから「歌掛け論」という文化人類学の新しいジャンルを展望する論攷である。</p> <p>本論文は全11章で構成され、「はじめに」と「おわりに」が冒頭と末尾に置かれる。「はじめに」では、プイ族の歌掛けに申請者が出会いフィールドを定めるに至ったまでの過程を素描する。続く第1章と第2章は序論に充てられる。それ以降の章は3つの部に分け、第3章～第5章が第1部、第6章～第9章が第2部、第10章と第11章が第3部を、それぞれ構成する。</p> <p>第1章では、山歌とは何かを概説したうえで、歌掛けという対象領域を画定する。ついで、民族音楽学と言語学の理論に依拠しながら、「歌」を「音楽的・言語的形式に従った発声行為」として定義する。</p> <p>第2章では、調査地・調査期間・調査対象に関する基本情報を示す。中国貴州省と、同省内の貴陽市および羅甸県の地理的概況をまとめ、プイ族の人口・衣服・伝統的な習俗を概説する。ついで、山歌には漢語貴州方言で歌われる「漢歌」とプイ語で歌われる「プイ歌」の2種類があることを示し、それぞれの言語学的特徴を略述している。</p> <p>第1部「山歌の社会的環境」では、山歌が伝承されてきた歴史的・社会的背景と、近年の変化について、民族・場・感覚という3つの角度から論じている。</p> <p>第3章では、中国政府が推し進めた民族識別工作(1953～1986)によってプイ族という範疇が人びとの実際の帰属意識とは乖離した形で成立した過程を検証したうえで、主体の行為性(エイジェンシー)を軸にしてアイデンティティの構築を捉えることの重要性を強調する。</p> <p>第4章では、「場所」の概念を手がかりにして、山歌の歴史的な背景と現代的な舞台とを分析する。「場所」とは、一定の中心をもち、社会関係の束で満たされ、固有の歴史が刻みこまれた領域として定義される。中華人民共和国成立以降に編まれた調査資料を精査し、男女間の求愛や豊穡儀礼としてよりも客人歓待の娯楽として山歌が歌われることが多かったと推定する。ついで、文化大革命による断絶を経て復興した山歌がステージでの上演などにより娯楽性を高めた過程を再構成する。さらに、現代では、VCDやDVDといったメディアの普及によって、山歌の商品化が進行していることを指摘し、申請者自身が参与観察したイベントの詳細を記述している。</p> <p>第5章では、観光人類学の理論を準拠枠として、山歌鑑賞者が何に惹きつけられているのかを検討する。観光の根底にある視覚中心主義に対する批判を跡づけたうえで、現代の山歌上演においては目を楽しませる演出が導入されていることに注目し、このジャンルが視覚表象の要素を観客へのアピールに取り入れていることを明らかにしている。</p>			

第2部「山歌の言語的相互行為論」では、山歌の転写資料を、旋律論、韻律論、修辞論、語用論という4つの角度から微視的に分析する。

第6章では、声調と旋律との一致の程度を分析した民族音楽学の多数の先行研究を吟味したのちに、漢歌とパイ歌のそれぞれについて、採譜資料に基づいて、歌詞を構成する各語の声調と旋律との対応関係を分析する。漢歌には有意な相関が認められないのに対して、パイ歌では両者が一致する傾向が強いことを明らかにしたうえで、パイ歌においても、漢歌と同様、歌詞の理解は旋律の定型性に依存していることを強調する。

第7章では、押韻、音数律、句間の平行関係を分析することによって、山歌の韻律規則を明らかにする。漢歌では押韻と音数律を支配する厳格な規則に従って平行関係が作られるのに対し、パイ歌では歌い手は臨機応変に韻を踏むこと、さらに、さまざまな襯詞や定型句を濾過するならば、基本的には七五調の音数律が浮かびあがることを示している。

第8章では、「聞いて心地よい」ことを意味する「好听」（ハオティン）という評価語の意味内容を歌手へのインタビューから浮かびあがらせ、とくに比喻表現の秀逸さが重要な評価基準となっていることを指摘する。さらに、漢歌では多彩な比喻表現と対照法・反復法を結び合わせることで詩句全体を緊密に組織する傾向が強いのに対し、パイ歌では概念的な隠喩によって行どうしを緩やかに結びつけ、誇張や迂言表現によって対象を生き生きとユーモラスに表現することがめざされていると論じる。

第9章では、テキスト分析理論の「結束性」と「整合性」、および会話分析理論の「ターン・テイキング」「隣接対」といった概念に依拠して、相互行為としての山歌の構造を分析する。漢歌では、先行ターンとの論理関係を示す接続表現が乏しく、ターン間の結束性を示す談話標識はあまり見出せないのに対し、長大なターンを交替させるパイ歌においては、結束性を示す談話標識が豊富に使われ、ターン全体を先行ターンへの応答として組織することによってやりとりの整合性を確保していると結論づける。

第3部「歌掛けの遊び論」は、「遊ぶ」「歌う」という人類普遍の営みを再考することによって、歌掛けの一般的特徴を明らかにすることをめざしている。

第10章では、世界各地に歌で言葉を掛けあう風習が見られることを確認したのちに、民俗学で注目を集めてきた奄美地方の歌掛けをパイ族の山歌と比較している。両者には韻律と修辞技法において多くの共通性が認められ、どちらも相手に対して整合性の高い応答をめざす言語的相互行為として組織されていることを強調したうえで、山歌では言語表現が突出した重要性を担うのに対し、奄美では身体運動と音楽表現の比重が高まっていることに注目している。

第11章では、ホイジンガをはじめとする遊びに関わる代表的な理論を参照し、そこから遊びの形式的特徴として、規則性、限定性、反復性を抽出している。歌掛けがこれらの特徴を満たしていることを確認したうえで、歌掛けの娯楽性の根底にあるのは、「声を出す」ことに内在する演戯性と身体を共鳴させる力であると結論づけている。

「おわりに」では、(1) 社会的環境の民族誌的記述、(2) 相互行為としての山歌の言語論的分析、(3) 遊びとしての歌掛けの普遍的特徴の解明、という3つの道すじを概括したうえで、それらすべてが、山歌が歌われる相互行為の場という単一の萃点を共有していると結論する。

(論文審査の結果の要旨)

古代日本に「歌垣」と呼ばれる歌掛けを含んだ習俗があったことはよく知られている。中尾佐助らが提唱した照葉樹林文化圏論において歌掛けが共通の文化要素とされたことから、民俗学においてこの習俗は、求愛、性の解放、豊穡儀礼などと結びつけられてきた。

本学位申請論文は、中国貴州省での延べ6年にわたる息の長いフィールドワークに基づき、少数民族プイ族の伝統的な文化実践である「山歌」を文化人類学・民族誌学の視点から徹底的に分析することによって、上記のような限定的な解釈を超えて、歌掛けという特異な芸能的・社会的な実践の特質を、社会環境・相互行為・遊びという3つの側面から多角的に究明した労作である。

本論文においてとくに高い学問的意義をもつ達成点を、以下の3つの側面に絞って報告する。

第一に、本研究によって、文化人類学のなかに「歌掛け論」とも呼ぶべき新しい研究ジャンルを確立しようとする申請者の野心と意欲は、高く評価される。この企ての射程の遠大さは、全11章を3部に分ける本論文の複雑な構成とその分量とに反映されている。しかも、分析のために援用される理論枠がきわめて広範囲にわたることも本論文の大きな特徴である。民族音楽学、民族アイデンティティ論、エイジェンシー論、観光人類学、言語学における語用論・修辞論・談話分析、社会学における会話分析、さらにはホイジンガやカイヨワに代表される遊び論などが、日本語、中国語、英語、仏語にまたがる夥しい文献資料によって参照される。この博覧強記ぶりは、申請者の研究者としての豊かな可能性を示すとともに、一見特化してみえる主題設定が広い理論的関心に裏づけられていることを証し立てている。

第二に、本論文の高い独創性は、山歌の言語的相互行為としての側面に着目し、中国語とプイ語の膨大な書き起こし資料を微視的かつ徹底的に分析した第2部の4つの章にもっとも顕著に体现されている。漢語またはプイ語を母語とする聴取者は定型化された旋律に乗せられなければ歌詞を聞き取ることができない。申請者は、歌詞を構成する単語の声調と、旋律の上行・平行・下行との相関を分析することによって、この謎をある程度は解き明かしている。また、漢歌には音数律を支配する厳格な規則があるのに対して、プイ歌では、歌手は柔軟性の高い即興を通じて、七五調の音数律を緩やかに志向しているという対照を照らしだすことに成功した。同様に、修辞的特徴とターン間の照応関係に関しても、漢歌とプイ歌には顕著な対照が見られることを明らかにしたうえで、どちらにおいても、山歌固有の形式とジャンル由来の定型的文脈による拘束のなかで、2組の歌い手たちが結束性をもった歌詞を整合的に組み立て、先行する相手の歌に応答していることを、説得力をもって論証している。言語人類学の分野では、さまざまな土着の文脈で、多様な形式をもった言語交換の構造を明らかにする膨大な資料が蓄積されてきたが、歌掛けという形式をこれほど精密に分析した例はおそらく初めてであり、この分野の発展に重要な貢献を果たしたといえる。

第三に、少数民族として分類された人びとと、民族の表徴である伝統芸能との両義的な関係を生き生きと記述した点で、本論文は高い民族誌的な価値をもつ。中国政府の推進した民族識別工作によって半ば受動的にプイ族というカテゴリーを賦与されながらも、中年層以上のプイの人びとは、かれらに長く受け継がれてきた山歌を確実に楽しんでいる。しかも、それは個人的な社交の場での娯楽から視覚的な刺激を伴うステージ上のパフォーマンスへと拡大したばかりか、VCD、DVDといったメディアの普及によって商品化の波に洗われている。そのような動向とは対照的に、青年層は音楽的

な官能性に乏しい山歌に関心を示さないので、今後の存続が危ぶまれる。このような現代的な状況を参与観察に基づいて活写した点において、本論文は、社会主義体制下における伝統文化の存続と変容という問題系を解明することに対して、貴重な寄与をなした。同時に、本論文の記述と分析は、歌い手たちの記憶に蓄えられた膨大な定型表現が文脈に応じて即興的に呼び出されるさまを鮮やかに照らしている点においても、身体技芸の研究一般に大きな刺激を与えるものである。

だが、本論文がめざしている、総合的な歌掛け論を確立するという企ては、それがきわめて野心的であるがゆえに、いくつかの弱点を抱えていることを指摘しなければならない。

第一に、3つの部の探究の方向性が分散しており、3部すべてを統合した議論を展開するに至っていない。多数の先行理論が参照されているが、自らの分析から掴みとった民族誌的知見に照らして理論を批判的に乗り越えようとする姿勢に乏しいので、多くの章において、あまりにも一般的な印象を与える結論を導き出すにとどまっている。第二に、本研究のもっとも大きな限界は、コミュニティ調査に基づく社会関係と社会構造の記述・分析が欠落していることである。それゆえ、通婚圏をはじめとする地域社会の形が山歌にどんな影響を及ぼしているかが明らかでない。第三に、漢歌とプイ歌を比較することを微視的な分析の軸にしているが、両者の差異を言語の差に還元することは説得力に欠ける。ジャンルや形式の違いが差を生み出している可能性をもっと考慮すべきであった。第四に、中国語の声調と歌の旋律との間の関係に関しては、京劇をはじめとする歌唱芸術の研究において膨大な蓄積がある。それらを参照せずに、西欧の民族音楽学の文献だけに依拠して統計的な検定を適用することは、偏頗な分析に陥る危険性を孕んでいる。

以上のように、本論文には無視しえぬ瑕疵が見られるが、それらは上述した本論文の価値を損なうほどのものではない。また、これらの限界は、今後、申請者が東南アジアなどに新たなフィールドを開拓するとともに、本論文で発揮した博覧強記を、より批判的な文献読解と結合させることにより、遠からず乗り越えることができると考えられる。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年12月1日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降